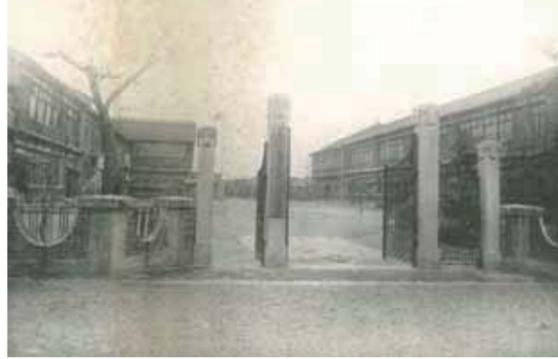


昭和初期の旭区



写真■古市尋常高等小学校校舎
昭和13年(1938)当時の写真

古市尋常高等小学校

私は京都紫野に生まれ、昭和5年(1930)の夏に千林へ引っ越してきました。両親は迷子の心配をして新しい住所を懸命に教えたようです。

引越し早々、近所のおうどん屋さんへお使いに行かされ、「大阪市東成区千林町1261、うどん3つ持ってきてください（※昭和のはじめは旭区ではなく東成区といった）」と一息に言うが早いのか、くるりと踵を返すと、すたこら帰ってきた。その後ろからお店の人がついてきて、どこの家かと確かめたということでした。

室戸台風

昭和9年(1934)9月21日。忘れもしない室戸台風の日。

朝から妙に強い風。それは庭木をぐいぐい倒さんばかり、もとはには戻りそうにもない強さ。

「今までと違う風だから学校を休ませよ」と言って、父は出勤したそうです。母は、風ぐらいで休んではだめといったので、ランドセルに雨合羽で商店街を必死に学校へ向かいました。目前に看板がパタンと倒れたのを踏みながらやっと学校の前に着いたのはちょうど8時頃だったか、門の前で先生がみんなを追い返す仕事で何か叫びながら必死の形相。

子供心にも大変なことが起こっているのだとまた門前でくるり、すたこらさっさと、もと来た道を家まで

戦災

昭和10年(1935)。新森小路中二丁目へ引っ越し、ここで23年まで暮らしました。

昭和13年(1938)には、枚方禁野の火薬庫の爆発を遠望。第二次大戦の戦中戦後は、隣組とか食糧の配給制度でなんでも並ぶとか衣料切符など大変な目にありました。空襲警報が出れば、近くの広場に掘った防空壕へ大切なものを抱えて、一目散に逃げるのは常日頃のことでした。

昭和20年(1945)から一年間造幣局へ勤めました。

た。小さい子供の言葉を信じかねたのかもしれない。

昭和8年(1933)、古市尋常高等小学校に入学（このとき私の家の隣と向かい清水小学校に通っていたようです）。今で言う、千林商店街を通って通学。京阪電車の複々線工事が始まっていて、北田の肉屋さんの横に踏み切りがあり、いつも注意せよと言われていたのを思い出します。

学校の裏門近くには細い川が流れ、近所のお母さんが洗濯をしていました。

一生懸命に駆け戻りました。

後でわかったことは、何でも講堂の屋根だか柱だかが空を飛んだということでした。もちろん屋根瓦は、木の葉のように空を舞っていました。家の外でずぶぬれになって心配そうに私の帰りを待っていてくれた母に飛びついて、おもいきり泣いたのを今でもはっきりと覚えています。

幸い我が家は、ガラスの破損くらいですみましたが、級友が切り傷を負っていたのを悲しく思い出します。この台風で守口小学校は倒壊し、死人けが人数と聞きました。

この台風以降、暴風警報が発令されるようになったとのことでした。

が、空襲警報の時には京阪線の土手に隠れるようにして、森小路から造幣局まで歩いて出勤しました。非常時出勤手当が出たのを覚えています。

昭和20年(1945)6月7日の空襲では、京阪線の野田橋から先は焼け野原とかで、森小路へ帰るのに四条畷の方まで回って帰りました。家の一筋南に焼夷弾が落ちて、寝たきりの人の横を突き抜けたら、その人が飛んで起きたとか。この時我が家は焼失をまぬがれました。

戦後の暮らしは大変で、燃料になるやけぼっくいを天満橋のほうまで大八車で取りに行ったり、着物を持って田舎へ食料の調達に行ったり、竹の子生活は長く続きました。



写真■平太の渡し

この写真は、昭和45年(1970)3月3日「平太(田)の渡し」廃止の日の写真です。豊里大橋の完成により淀川に最後まで残っていた渡し船がなくなりました。

終戦～その後

昭和22年(1947)。森小路の家には、大家の息子が復員してくるので空け渡しを迫られていました。丁度その頃は戦後の住宅不足で、急遽簡易住宅があちこちに建設され、橋寺町の府営住宅に入れたのは昭和23年(1948)の春でした。二戸一で三種類の建て方があったように思います。もともと、河川敷のようなところに建てられたのでガタガタでしたが、みんなの結束はかなり強かったようです。開拓村といった感じでした。

地番は旭区ですが、少し行くと守口市。行政のさまざまな手続きは、守口市の方が便利な土地柄です。北東の方向には井路川が流れ、国道に出るには大回りしないと橋もない不便さに、住民一体となって運動して弥生橋をかけてもらい、治安が悪いので、橋寺駐在所も設置されました。このようにして徐々に住みやすい町になっていきました。

守口市に隣接する昔の境界線は川にそって斜めになっており、ここに家を建てると玄関のあるほうの行

政地区に所属することになるので『ギザギザの境界線』になったということです。さしずめ、隣は無料パスで町に出られるが我が家にはその便宜はないということです。ゴミの収集日も違うでしょうし、実際その辺はどうなのか気にはなるものの、深く追求したことはありません。淀川工業高校が火災のとき、旭区と守口市の両方から消防車が来たと聞いています。

いつ頃だったか土地が払い下げになり、徐々に個性のある町に変貌していきました。

昭和45年(1970)には豊里大橋の開通に伴い平太の渡しが閉業。その当日は、大変な賑わいだったのを覚えています。私もカメラをさげてモノクロで撮影したのですが、フィルムが見あたらず残念です。

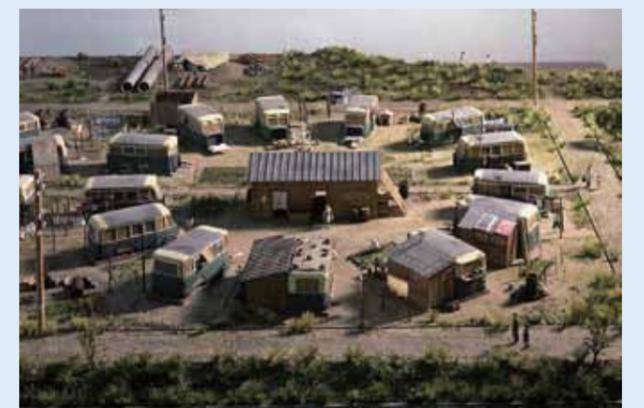
この渡しには昔よく乗せてもらい、向こう岸で遊びすぎて終了となり、電車で遠回りして帰宅したことも懐かしい思い出となりました。今は兩岸に碑が建っています。

コラム 城北バス住宅

第2次世界大戦の幾度かの空襲によって、市街地中心部は広範囲にわたって焦土化しました。

城北バス住宅は、焼け出された人々の救済のため、廃車になった木炭バスを利用した市営住宅で、バスを円形に並べて、その中心に共用施設を配置していました。

バス住宅には電線が引き込まれ、居住スペースを確保するため建て増しが行われていました。周りには、畑や野菜作りも行われていた空き地があり、江野川、爆弾池等とともに、子どもの遊び場であったことを覚えています。



写真■城北バス住宅（復元模型）

写真提供：大阪くらしの今昔館、撮影：京極寛